

**The Buddhist Scriptures Collected by
Jikakudaishi Ennin (慈覚大師円仁) in Chang an (Tang) :
A Reconsideration on the Collecting Activities Viewed from his Diary**

〈in Japanese〉

Myokaku Kominami

Candidate for Doctorate, Section of History, Graduate School of Letters,
Kyoto Women's University

Abstract

It is well known that the third chief-abbot of the Japanese Tendai Sect, Jikakudaishi Ennin, went over to the Tang Changan in search of the Buddhist law, gained some Buddhist scriptures which include the famous three inventories, and brought back them to Japan. These inventories are “Nihonkoku jōwagonen nittōguhō mokuroku,” “Jikakudaishi zaitō sōshinroku,” and “Nittō singu syōgyō mokuroku.” This study reconsiders the process and background of his activities of collecting Buddhist scriptures in China, which have not yet been well studied until today. The author pays attention to Ennin’s diary (“Nittō guhōjunreikōki”), his record of itinerary in the continent. First, I reconfirm the contents of those inventories. Second I elaborately compare them with the descriptions in his diary. And it will become obvious that Ennin received a series of Esoteric Buddhist teachings from 838 to 845 before he was given many books. Ennin’s diary tells us the details of his activities of collecting scriptures as follows.

Ennin was given the teachings of Buddhist *kongōkai* (*vajradhātu*) and some books about *kongōkai* by Gensei (Xuanzheng) of Daxingshan-si Temple in 840. Next year, he received the *kanjō* ceremony of *taizōkai* (*garbhadhātu*) and *soshitsuji* (*susiddhikara*), and also got some books on the above-mentioned two worlds from Gishin (Yizhen) of Qinglong-si Temple. In the following year, he received the *kanjō* ceremony of *taizōkai* and acquired some other books from Hassen (Faquan) of Xuanfa-si Temple. He also learned *shittan* (Sanskrit) and got the 83 books about Sanskrit from Genkan (Yuanjian) and Hōgetsu (Baoyue). Finally, in addition to these views, the author described a genealogical chart of *taizōkai* and *kongōkai*.

要旨

本稿の研究目的は、日本天台宗三世座主慈覚大師円仁（794—864）の入唐求法のうち、長安での将来物蒐集について、『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の三目録と円仁の旅行記である『入唐求法巡礼行記』との関連に着目し、円仁の将来物求得の経過や事情、内容を明らかにすることである。円仁の『巡礼記』と将来目録を史料として、開成5年（840）から会昌5年（845）までの求法活動と求得した将来物の入手背景や密教の受法について考察した。この結果、以下のように目録に記載の将来物と『巡礼記』の関連性が明らかになった。開成5年大興善寺の元政より金剛界灌頂を受け、目録に見られる金剛界関係の儀軌や念誦法を借写した。また、会昌元年（841）青龍寺の義真より胎蔵界と蘇悉地の大法を受け、胎蔵界と蘇悉地関係の書物を得るとともに、胎蔵曼荼羅を制作している。会昌2年（842）には、玄法寺の法全より胎蔵界大法を受け、胎蔵界の書物を入手した。さらに、大安国寺の元簡や宝月から悉曇を受法し、梵語・梵漢両字の書目83部を得た。最後に、造玄・海雲の血脈譜ならびに『巡礼記』などによって胎蔵界と金剛界の系譜を示したが、円仁の密教教学の特色は、胎蔵界・金剛界・蘇悉地の三部大法を受法したことにある。なお、円仁の密教教学の特徴である「一大円教論」については、元政からの教示によるものであることが確認できた。

慈覚大師円仁の長安における将来物蒐集に関する研究

小南 妙覚

キーワード：慈覚大師円仁、『入唐求法巡礼行記』、『入唐新求聖教目録』、
真言密教、灌頂

序言

慈覚大師円仁（794-864）は、第17次遣唐使の一行に随い、遣唐請益僧として承和5年（838）入唐し、承和14年（847）に帰国するまでの9年3ヶ月の間、揚州・五台山・長安での求法を果たし、その間に真言密教・梵字悉曇・五会念仏・天台法門などを伝承した。特に、開成5年（840、承和7年）から大中元年（847、承和14年）の最も長期にわたって滞在した唐の都長安城においては、歴史上名高い会昌廃仏（842—846年）に遭遇しており、波乱に満ちた求法の様子は『入唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』）として克明に記録されている。また、円仁が蒐集した700部余りの経論章疏・曼荼羅など将来物の詳細は将来目録三種（『日本国承和五年入唐求法目録』⁽¹⁾、『慈覚大師在唐送進録』⁽²⁾、『入唐新求聖教目録』⁽³⁾）に記されている。将来物の中には『巡礼記』によって求得の過程を窺うことができるものが多く見られ、『巡礼記』の記載と将来目録を照らし合わせて円仁の将来物蒐集について考察を行うことにより、円仁の入唐求法の実態がより明らかになると考えられる。しかし、従来論考において、円仁の入唐求法に関する考察は多数行われているが、この『巡礼記』と将来目録の関連性に焦点を当てて論じられたことはなかったといえる。従って、本稿では筆者がこれまで行ってきた三目録の考察を踏まえ⁽⁴⁾、

⁽¹⁾ 高楠順次郎編『大正新脩大蔵経』第55巻、大蔵出版、1977年、1074a—1076頁b。

⁽²⁾ 同上、1076b—1078b。

⁽³⁾ 同上、1078b—1087b。

⁽⁴⁾ 『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の作成過程について、小南沙月「円仁将来目録の研究—『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の成立過程—」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第14号、2015年、『承和五年目録』と『在唐送進録』の諸本の紹介及び分析については、小南沙月「円仁将来目録の研究—『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析—」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第15号、2016年にて行っている。また、『新求目録』の諸本の紹介と翻刻は小南沙月「慈覚大師円仁『入唐新求聖教目録』『史窓』第74号、2017年、『新求目録』の内容分析は小南沙月「慈覚大師円仁将来目録の研究—『入唐新求聖教目録』の概要—」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学

いかなる状況や経過により将来物が得られたのかという点について、『巡礼記』の記述を時系列で追いながら、将来目録から関連する書目を抜き出し、『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』）をはじめとする関連史料に依って考察を進めていく。なお、本稿では円仁の入唐求法の終着地であり、密教の受法を重点的に行った長安に絞り、円仁の総目録である『入唐新求聖教目録』（以下『新求目録』）を用いて円仁の求法活動と将来物蒐集の状況について明らかにしていきたい。なお『新求目録』に記載されている将来物については傍線（—）を付して表示した。

開成5年（840）の求法活動と将来物蒐集

円仁の長安における具体的な活動及び将来物について、『巡礼記』に基づき開成5年（840）から会昌5年（845）まで考察していきたい。本稿では『巡礼記』の原文を小野勝年氏による『入唐求法巡礼行記の研究』⁽⁵⁾に依拠し、原文引用の下には巻数と頁数を括弧内に「小野、巻数、頁数」として表示した⁽⁶⁾。

伝教大師最澄（766—822）滅後の天台教団が抱えていた課題を背負って入唐した円仁は、『日本国承和五年入唐求法目録』⁽⁷⁾（以下『承和五年目録』）によると、開成3年（838）8月24日から開成4年（839）2月18日の6ヶ月間滞在した揚州において、終南山宗叡より悉曇を受法し、嵩山院の全雅阿闍梨より金剛界諸尊儀軌及び曼荼羅など密教法門を囑授されている⁽⁸⁾。次に、『巡礼記』の記述によると、同年6月7日に登った赤山法華院では、

編』第16号、2017年にて行った。

⁽⁵⁾ 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第1—第4巻、鈴木学術財団、1964—1969年。

⁽⁶⁾ この『入唐求法巡礼行記の研究』は、錯簡が見られる『巡礼記』の原文を整理して校訂されたもので、小野氏によって文字が補われている箇所があるが、本稿では原文のまま掲載することとした。また、取り上げる将来物の名称については、現存最古の青蓮院本に基づき、誤りのある箇所は諸本との対校を行い、修正を加えた上で記載した。

⁽⁷⁾ 円仁将来目録の成立過程の概要を記しておく、第一の『承和五年目録』は揚州での求法を終えた円仁が帰国を目指す遣唐使第二船に乗船し、山東半島を北上中の開成4年（839）4月20日に書き上げられたものである。開成4年4月5日に円仁が遣唐使に託した揚州求法の将来物（小野1、483頁）は、第八船に積まれて同年8月19日日本に到着し、そして、将来物を受け取った延暦寺によって承和7年（840）1月19日に将来物を点検し朝廷へ報告するために作成された目録が『在唐送進録』である。

第三の『新求目録』は、その末尾の文章によると、承和14年（847）9月19日太宰府に到った円仁が、同年12月までの間に求法の成果を朝廷に報告するための総目録として本目録を作成したと考えられる。

⁽⁸⁾ 前件法門等、円仁、去承和五年八月到_大都督府_、巡_歴城内諸寺_、写取如_前。爰有_{終南山}宗叡和尚_{学逮}先達_、悟_究幽致_、能解_梵漢之語_、妙閑_{悉曇}之音_{。為}向_西天_辞旧到_府。円仁幸得_遇謁_、受_学梵天悉曇_、兼_習梵漢之語_{。又逢}大_唐内供奉誓弘阿闍梨付法弟子_{全雅阿闍梨}、諮_稟秘法_{。和尚感}乎遠誠_、付以_秘要_{。遂乃囑}授念誦法門_、并胎藏金剛両部曼荼羅・諸壇様等_{。其後擬}向_天台_、為_行路遼遠_{往還失}時_{。有}勅不_許発赴_、慨悵難_及。所_求法門雖_未備足_、且録_卷秩_{勘定如}件_{。（小南沙月「円仁将来目録の研究—『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析—」『京都女子大学大学院文学研究}

11月16日条の新羅式礼懺や赤山講經儀式（小野2、138頁）、11月22日条に見える新羅誦經の儀式（小野2、143頁）などを見聞している。その後の4月28日に到った五台山では、開成5年5月1日から7月4日の間、竹林寺で法照（—766—）流の五会念仏を見聞し、5月16日に到った大華嚴寺にて『摩訶止観』（小野2、460頁）や『法華経』の講義が行われ（小野3、5頁）、常に法華三昧が修されていることを知った（小野2、460頁）。『新求目録』（『大正蔵』55、1084c—1085b）によると、五台山では34部37巻の天台典籍を求得している。

7月26日、長安に向かって五台山を出発した円仁は、8月20日長安城の東の章敬寺前に到り、長安での求法を始めた。円仁が最初に到った章敬寺は長安屈指の大寺院とされ、寺内の浄土院においては、かつて法照が『浄土五会念仏略法事儀讃』一卷を著わしたことがその撰号「南岳沙門法照於上都章敬寺浄土院述」（『大正蔵』47、474c）によって知られ、長安における円仁と五会念仏との関係についても注目される。この点は、次の開成6年の項で取り上げる。

8月23日、長安左街の功德巡院（僧尼を統括する功德使の出張所）にて提出した状文には、「伏請_レ寄_レ住城中寺舎_一、尋_レ師聽学_一」（小野3、264頁）とあり、長安城内の寺舎に滞在して師匠を尋ねることを請うている。円仁の要請により、この日より在唐中最も長期間過ごすことになる資聖寺（左街崇仁坊）に滞在する生活が始まった。『新求目録』には、資聖寺に関する将来物として、『長安資聖寺粥利記』一卷 内州道場談論沙門知玄述、「長安資聖寺翻訳講論大徳貞慧法師記并碑」一卷、「長安資聖寺宝応観音院壁上南岳天台等真影讃」一卷が見られる。

8月24日、使衙の南門（左街功德使の衙門の正門）にて滞在の理由を問われた円仁は、巡礼の経過を記した上で再度「今請_下権寄_レ住城中寺舎_一、尋_レ師聽学_一、劫_中帰本国_上。」（小野3、268頁）、すなわち長安城の寺院に住み師を尋ねて学問することを請い、8月26日には「綱維安_レ排房院_一、於_レ浄土院_一安置。（中略）毎向_レ諸僧_一尋_レ問持念知法人_一、未_レ得_レ的実_一。」（小野3、278頁）とあり、資聖寺内の浄土院に居住することになり、諸僧に対して正法を伝持し真言密教に通じた人はいないかと尋ねたが、的確な回答は得られなかったようである。

9月5日、「夜、繫_レ念毘沙門_一、誓願乞_レ示_レ知法人_一。」（小野3、280頁）とあり、毘沙門天王（多聞天）に法を知る師匠を示すように誓願しており、毘沙門天への厚い信仰を持っていたことが窺える。これに関して、『新求目録』には長安での求得として『毗沙門天王経一品』一卷 不空、『北方毗沙門天真言法』一卷 不空が見られ、毘沙門天関係の書を将来している。さらに、比叡山における円仁の毘沙門天信仰の伝承として、『阿娑縛抄』「諸寺縁起」下には、

首楞嚴院、在_レ大寺北_一、相去八九里。根本観音堂、俗曰_レ横川中堂_一。在_レ砂碓堂ノ西_一、葺檜皮七間堂宇、前有_レ孫庇_一、安_レ置聖観音像一体、不動毗沙門像一

『科学研究紀要』第15号、2016年、37頁）。

体。右慈覚大師入唐求法之後、解纜浮舶之間、忽遇大風、欲没南海。念彼觀音力、現毗沙門身。大師即使囑画彼像、風晴波平、須臾著彼岸。歸山之後、建立一堂、安置觀音像・毗沙門像。依彼海上願所被果遂也。嘉祥元年九月、建立一堂、囑絵天像、更造移木像、与聖觀音共安置矣、云々。(鈴木學術財団編『大日本仏教全書』60卷、鈴木學術財団、1971年、280頁c)

とあり、円仁が入唐求法の折大風に会い南海に没しようとした時、観音力を念じたところ毘沙門が現れ、その姿を描いたところ無事着岸した。そして、この靈驗により円仁帰国後、比叡山横川に根本觀音堂（横川中堂）を創建して、聖觀音像と毘沙門像を安置したと伝えている。

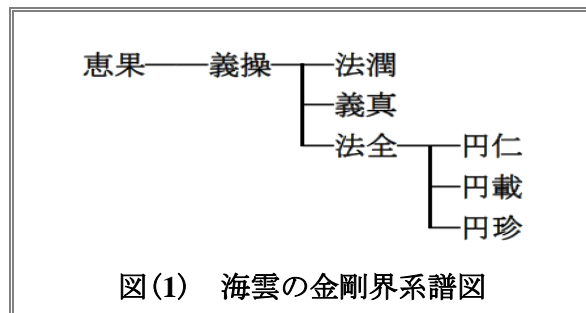
9月16日、浄土院に住していた密教僧懷慶より長安城にて「大法」すなわち金剛界と胎藏界の大法を解している和尚に関する情報を得ている。これは9月5日の毘沙門天への繫念による成果の表れともいえるであろう。その内容は以下の通りである。

語曰、如要持秘法、余能知一城内解大法人。青龍寺潤和尚但解胎藏、深得一業。城中皆許好手。彼寺雖有西国僧、未多解語、持念之業、不多少解。大興善寺文悟闍梨、解金剛界、城中好手。青龍寺義真和尚兼兩部。大興善寺有元政和尚、深解金剛界、事理相解。彼寺雖有西国難陀三藏、不多少解唐語。大安国寺有元簡阿闍梨、解金剛界好手、兼解悉曇、解画、解書梵字。玄法寺法全和尚深解三部大法。(小野3、283頁)

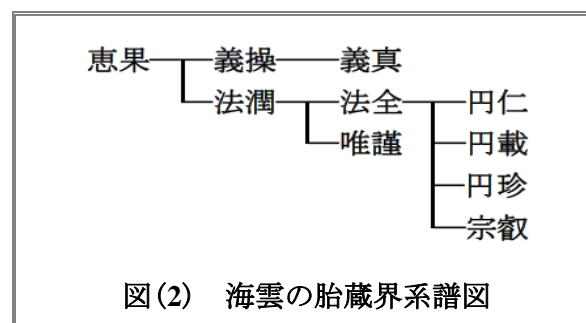
懷慶の話によると、青龍寺に胎藏界大法のみを解している潤（法潤）和尚、会昌元年（841）6月11日条（小野3、399頁）によって宝月三藏と知られる西国僧、大興善寺には金剛界大法を解している文悟阿闍梨、青龍寺には胎金兩部を兼ねている義真和尚がおり、深く金剛界を解し事（行法）と理（教理）に達している大興善寺の元政阿闍梨、唐語を解さないインド人難陀三藏がいたとある。また、金剛界ならびに悉曇を解しており、曼荼羅・図像類を描き梵字を書くことにも通じている大安国寺の元簡阿闍梨、深く「三部大法」すなわち胎藏・金剛・蘇悉地を解している玄法寺の法全和尚についても述べられている。

この密教の大法は師匠から弟子へと伝えられるものであり、その相承の系譜を示したものは「血脈譜」と呼ばれている。長安浄住寺の僧侶海雲が太和8年（834）に撰した『金胎兩界師相承』（『大日本続藏經』第1輯、95、5冊、496—497頁）によって、金剛界の系譜から9月16日条の記述に見える和尚と入唐天台僧を抜き出すと以下のような。ただし、法全より受法の円仁、円載、智証大師円珍（814—891）、宗叡（809—884）

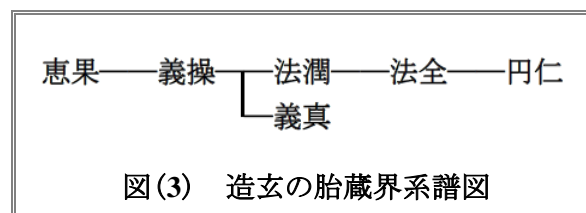
の日本僧への相承系譜については、日本伝来の永暦元年（1160）写の僧範果の本の裏書に基づく海雲以後の加筆と見られる⁹⁾（『大日本統蔵経』1、95、5、494頁）。



次に、胎蔵界の系譜については『金胎両界師相承』（『大日本統蔵経』1、95、5、496—497頁）によると、次の通りである。

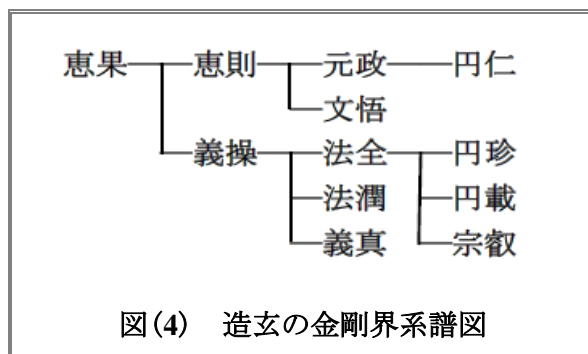


また、咸通6年（865）に示された造玄の『胎金両界血脈』では、胎蔵界の系譜は下のようになっている（前掲書、497—498頁）。



⁹⁾ 海雲の『略叙伝大毗盧舍那成仏神変加持経大教相承伝法次第記』の奥書（『大日本統蔵経』1、95、5、494頁）には「巨唐大和八年歳次甲寅十月上旬有八日 清凉山大花嚴寺 伝法苾芻海雲集記」とあるが、その後に続いて「日本裏書、浄住寺僧道昇 玄法寺僧法全惟謹青龍寺僧法全和尚所伝胎蔵大法則有 安国寺僧敬友永寿寺僧文懿永保寺僧智満新羅国僧弘印慈恩寺僧操玄日本国僧円仁円載円珍遍明宗叡又当院弘悦安国寺僧文逸興唐自怱薦福寺惠怱俗居士丁建武郭茂炫。永暦元年五月二十日於 勸修寺西明院 書写了、僧範果之本。」と記されている。

この法全は、以下の金剛界の系譜にもその名があり、円仁とともに入唐した留学僧円載ならびに後に入唐した円珍にも大法を授けていることが分かる。



以上の海雲ならびに造玄の胎藏界金剛界両部に示された系譜には、法全と元政から円仁への相承のみが記されているが、実際の受法は後に取り上げるように義真からもあり、また悉曇については宝月、元簡から受けることになる。

10月13日条には、

差_レ惟正_一、共_レ懐慶阿闍梨_一、遣_レ青龍寺_一、令_レ見_レ知法人_一。於_レ東塔院_一有_レ義真和尚_一、解_レ胎藏_一。日本国行闍梨於_レ此学_レ法。更有_レ法潤和尚_一、解_レ金剛界_一、年七十三、風疾老耄。」(小野3、302頁)

とあり、弟子僧惟正を懐慶とともに青龍寺に遣わしている。その結果、東塔院にて義真の元で入唐真言僧の円行が胎藏界大法を学んでいたこと、法潤和尚が73歳の高齢で病体であることを聞いている。また、10月16日条には、

遣_レ大興善寺_一令_レ簡_レ折知法人_一。翻經院有_レ元政阿闍梨_一、解_レ金剛界_一。持念文書備足。天竺難陀三藏不_レ多解_レ唐語_一。文悟阿闍梨不_レ及_レ於_レ政阿闍梨_一。(小野3、303頁)

とあり、大興善寺翻經院の元政阿闍梨は金剛界を解し、持念の文書は備わっていること、先述の通りインドの僧侶難陀は中国語を理解しておらず、また文悟阿闍梨は元政に及ばないことを聞いている。以上の情報により、法潤及び文悟、難陀の元での受法は選ばなかったことが窺える。文悟は、先述の造玄の血脈譜によると、金剛界における恵果の法孫であるとともに恵則の弟子であり、元政の兄弟弟子であった。難陀三藏は、会昌5年(845)5月11日条によると北インド出身の僧侶であったことが知られ、円行の『靈巖寺和尚請来法門道具等目録』には、難陀より授かった「仏舍利二百余粒」、「梵夾一具」(『大正藏』55、1073b)が記されている。

上記の情報を踏まえ、翌日の10月17日、「遣_レ状起_ニ居政阿闍梨_一、兼借_ニ請念誦法門_一。」(小野3、304頁)とあり、元政の元に書状を送り念誦の法門を借りることを請うた後、10月18日、元政から借りた念誦法門の書写を開始している。10月29日は、円仁が大興善寺の勅置翻經院において初めて元政和尚に見え、彼より金剛界大法を受けた重要な日として注目すべきである。『巡礼記』には次のように記されている。

往_ニ大興善寺_一、入_ニ勅置翻經院_一。参_ニ見元政和尚_一、始受_ニ金剛界大法_一。入_ニ勅置灌頂道場_一、礼_ニ諸大曼荼羅_一。設_ニ供養_一、受_ニ灌頂_一。又翻經堂壁上画_ニ金剛智和尚及不空三蔵影_一。於_ニ翻經堂南_一、有_ニ大弁正広智不空和尚舍利塔_一。金剛智・不空二三蔵、曾於_ニ此院_一翻_レ經也。(小野3、308—309頁)

円仁が金剛界大法を受けた大興善寺翻經院は、乾元元年(758)頃に設置された長安三大訳経場(他に慈恩寺、薦福寺)の一つであり、かつて不空(705—774)が住していた訳場であった。円仁は勅置灌頂道場にて諸曼荼羅を礼拝し、元政より金剛界灌頂を受けているが、この勅置灌頂道場は、円照(719—800)集『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻1(『大正蔵』52巻、829b—830a)によると、乾元3年(760)に史元琮、広徳元年(763)に不空三蔵によって設置が請われた密教灌頂の道場であった⁽¹⁰⁾。灌頂とは、元来古代インドで国王即位及び立太子に当たり、その頂に四大海の水を灌ぐ儀式であったが、この帝王灌頂の厳儀の意義が仏教に取り入れられたものである。すなわち、灌頂道場の灌頂壇の前で阿闍梨が如来の五智を表す五瓶の水を弟子の頭頂に注いで、密教の奥義を伝授し、仏の大覚位を継承せしめる重要な儀式とされている。

この後、翻經堂にて壁上の金剛智(671—741)、不空の影像、堂の南にて大弁正広智(不空の賜号)不空の舍利塔を拝見している。上記の影像は、『新求目録』には「金剛智三蔵真影」一紙苗、「大広智不空三蔵真影」一紙苗として載っているものであると考えられる。12月8日、大暦玄宗皇帝の忌日(敬宗の間違いか)のため、勅が出され諸寺が齋を設け、大興善寺の内道場(内裏に設けられた仏事を行う堂宇)三教講論大徳の知玄が表讃している(小野3、318頁)。三教(儒教・仏教・道教)講論とは、三教の代表者が皇帝の前で各々の宗教の優劣について議論する儀式であり、仏教の代表者知玄(809—881)はこの後円仁が長安滞在中親交を持つことになる僧侶である。『宋高僧伝』巻6、唐彭州丹景山知玄伝(『大正蔵』50、743a—745a)によると、姓陳氏、眉州洪雅の人で後に三峡を下って荆襄を経て長安の資聖寺に到り、ここで経論を敷衍して僧俗に仰

⁽¹⁰⁾ 「請_下於_ニ興善寺_一置_中灌頂道場_上状一首 并墨勅
請_下大興善寺修_ニ灌頂_一道場_上。右臣竊觀度_レ災禦_レ難之法不_レ過_ニ秘密大乘_一。大乘之門灌頂為_レ最。…乾元三年閏四月十四日宮苑都巡使御侮梭尉右内率員外置同正員賜紫金魚袋内飛龍驅使臣史元琮状進。…請_レ置_ニ灌頂道場_一墨勅一首。大興善寺三蔵沙門不空、請_ニ為_レ国置_ニ灌頂道場_一。右不空聞、毘盧遮那包_ニ括万界_一。…広徳元年十一月十四日、大興善寺三蔵沙門不空状進。」

がれたことや、文宗皇帝に顧問として重んぜられ、また唯識などを学び外典など百家の言を極めていたことなどが記されている⁽¹¹⁾。知玄が著わした書物のうち、円仁将来の『新求目録』に『十四音弁』一卷 知玄述、『大報無遷論』一卷 知玄述、『長安資聖寺粥利記』一卷 知玄述、『長安左街大薦福寺讚仏牙偈』一卷 内供奉三教講論大徳知玄述の4点の書目が見られる。

12月22日、「令_三永昌坊王恵始画_二金剛界大曼荼羅四幅_一。」(小野3、325頁)とあり、永昌坊(朱雀街東第三街)の画工であった王恵に金剛界曼荼羅四幅を描かせ始めている。『新求目録』には、「金剛界大曼荼羅」一鋪五幅苗があるが、幅数が異なること、苗(無彩色)であることから、王恵の金剛界曼荼羅は、会昌廃仏によって将来できなかつたものかと思われる。

開成6(841)年の求法活動と将来物蒐集

年は開成6年(841)に改まり、正月8日に天子(皇帝)が長安城南門外の南郊壇(天を祀る祭壇)に行幸し、翌日の9日に丹鳳樓(長安大明宮丹鳳門の門樓)にて年号を会昌元年に改めている(小野3、338頁)。これに関する将来物として、『皇帝拝南郊儀注』一卷、『丹鳳樓賦』一卷がある。その題名から、前者は皇帝が南郊を拝する際の儀式的次第について、後者は丹鳳樓について詠まれた詩文であると思われるが、円仁はこの日行われた儀式にも関心を寄せていたことが窺える。続いて、「又勅於_二左右街七寺_一、開_二俗講_一。左街四処、此資聖寺令_三雲花寺賜紫大徳海岸法師講_二花嚴經_一。」(小野3、340頁)とあり、左右両街の七寺に勅が下されて俗講(俗人への経文の講義)が行われ、円仁が滞在する資聖寺においては、雲花寺(左街常楽坊)賜紫大徳の海岸が『華嚴経』を講じている。『新求目録』には、揚州求得として『集新旧齋文』五卷 上都雲花寺詠字太があり、雲花寺における別の僧侶が著わした書物も見られる。

2月8日の条には、

金剛界曼荼羅幀画了。又勅令_下章敬寺鏡霜法師、於_二諸寺_一、伝_中阿弥陀浄土念仏教_上。廿三日起首至_二廿五日_一、於_二此資聖寺_一伝_二念仏教_一。又巡_二諸寺_一、毎_レ寺三日、毎月巡輪不_レ絶。(小野3、351頁)

とあり、先述の金剛界曼荼羅が完成している。

また、この日勅が下され章敬寺の鏡霜法師が諸寺院において阿弥陀浄土念仏教を伝えることが命じられている。鏡霜は法照の弟子であることから、法照創始の五会念仏であ

⁽¹¹⁾ 「釈知玄、字後覚、姓陳氏、眉州洪雅人也。…下_二三峡_一。歴_二荆襄_一抵_二于神京資聖寺_一。此寺四海三学之人会要之地。玄敷_二演経論_一僧俗仰觀。戸外之履日其多矣。文宗皇帝聞_レ之宣入_二顧問_一。甚愜_二皇情_一。後学_二唯識論於安国信法師_一。又研_二習外典_一。経籍百家之言無_レ不_二該綜_一。」

ることは間違いなく、五台山のみならず、長安においても円仁は五会念仏を見聞し、あるいは伝承したものである。この五会念仏は『浄土五会念仏誦経観行儀』三卷（『大正蔵』85巻、1253b—1254a）によれば、法照が永泰2年（766）に南岳弥陀台で般舟三昧を修していた折、『無量寿経』に基づく極楽浄土の水鳥樹林の五会の音曲の念仏を阿弥陀如来より親授されたものと伝えている。また五会念仏は、善導系の口称念仏の流れを汲みながらも、天台の中道実相観を得るための止観念仏と往生極楽のための念仏を融合したものであったと伝えられている⁽¹²⁾。

なお、長安より将来の浄土教に関する典籍として、『新求目録』には『安楽集』一卷 沙門道綽撰、『浄土法事讚』二卷 善導和尚撰、『念仏讚』一卷 章敬寺弘素述がある。

そして、同日薦福寺翻経院にて義浄三蔵（635—713）の真影を拝見しているが、この真影については、円照撰『貞元新定釈教目録』巻13によると、「太極元年門人比丘崇勗摹三蔵和上真。和上時年七十八也。」（『大正蔵』55巻、870頁 a）とあり、太極元年（712）2月22日、門人崇勗が描いた78歳の時のものであると伝えている。義浄に関するものとして、長安にて義浄訳の『梵語千字文』一本、『唐梵対訳千字文』一本を将来している。

2月13日は、円仁が元政より金剛界大法を受け終えた重要な日である。『巡礼記』には「受_レ金剛界大法_ニ畢。供_レ養金剛界曼荼羅_ニ、及受_レ伝法灌頂_ニ。以_レ五瓶水_ニ、灌_レ於頂上_ニ。至_レ夜、供_レ十二天_ニ。毎事吉祥。兼登_レ慈恩寺塔_ニ。」（小野3、364頁）とあり、前述の完成した金剛界曼荼羅を供養し、元政より伝法灌頂を受け、五個の水瓶に入れた香水を頭頂に灌ぐ作法が行われている。夜に十二天を供養する儀式も行われたが、これは伝法灌頂に関係する行法と見られる。十二天供に関する仏典として、五大院安然（841—802—）撰『諸阿闍梨真言密教部類総録』巻下には『供養十二天法』一卷、『施八方天儀則』一卷が載っており、それぞれ「仁」（円仁）将来となっている（『大正蔵』55、1128c）が、これらは『新求目録』に見られないものである。

2月15日、「興唐寺奉_レ為_レ国_ニ開_レ灌頂道場_ニ。從_レ十五日_ニ至_レ四月八日_ニ、有縁赴来結縁灌頂。」（小野3、370頁）とあり、興唐寺（街東第四街の大寧坊の東南端）において灌頂道場が開かれ、2月15日より4月8日の長期にわたり、有縁の在俗の信者に結縁灌頂が行われている。4月1日の条には、「大興善寺翻経院為_レ国_ニ開_レ灌頂道場_ニ。直到_レ廿三日_ニ罷。」（小野3、373頁）とあり、4月1日から4月23日にかけて大興善寺翻経院においても結縁灌頂が行われている。『日本三代実録』巻8、貞観6年（864）正月14日の円仁卒伝によれば、「嘉祥二年五月於_レ延暦寺_ニ、始修_レ灌頂_ニ。官給_レ一千僧供新_ニ、用_レ内蔵寮物_ニ。勅遣_レ参議従四位下守右大弁伴宿禰善男_ニ檢校。而飲_レ誓水_ニ者一千余人。（『新訂増補国史大系日本三代実録』前編126頁）とあり、円仁が帰国後の嘉祥2年（849）5月、一千余人に結縁灌頂を行っていることを考えると、これらの見聞は入唐求法の成果や影響を考える上で重要な出来事の一つであろう。

⁽¹²⁾ 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、1979年、33頁—35頁。

4月4日、「往_二青龍寺_一、入_二東塔院_一。委細訪_二見諸曼荼羅_一。」(小野3、374頁)とあり、この日円仁は青龍寺東塔院で諸曼荼羅を拝見している。4月7日は「往_二大興善寺_一、入_二灌頂道場_一随喜。及登_二大聖文殊閣_一。」(小野3、374頁)とあり、大興善寺翻經院内の灌頂道場に入り、大聖文殊閣に登っている。この大聖文殊閣は、大暦7年(766)不空によって勅建されたものであるが、不空訳の文殊に関する仏典は、『新求目録』に『金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相』一卷を始めとして多数見られる。

4月28日条には「始画_二胎藏幀_一。」(小野3、381頁)とあり、始めて絵師王恵によって胎藏界曼荼羅が描き制作された。この後「興善寺新訳経、念誦法等、四月廿二日写了。和尚曰、余所_レ解金剛界大法盡付嘱了。其法門等盡写了。更有_二不足_一者、別処尋覓。与_二元政和尚_一金、前後都計二五両、自外不_レ在_二数限_一。」(小野3、382頁)とあり、元政より借り得た新訳の經典、念誦法門の書写を4月22日に大興善寺にて終えている。元政が言うには、金剛界大法は悉く円仁に付嘱しおわり、仏典を全て写させたので、さらに不足があれば他所に尋ねるようにとのことであった。なお、胎藏幀の記事については重ねて4月28日の条が見られ、「下_レ手、画_二胎藏幀_一。」(小野3、386頁)と重複が見られる。この曼荼羅制作の指揮者については、4月4日の条に「往_二青龍寺_一、入_二東塔院_一、委細訪_二見諸曼荼羅_一。」(小野3、374頁)とあり、また同4月28日条に「喜_下遇_二(義真)和尚_一、求_中学胎藏大法_上」(小野3、382頁)とあることから青龍寺阿闍梨義真と推定される。『新求目録』には、長安より将来の胎藏曼荼羅として「大悲胎藏法曼荼羅」一鋪三幅苗、「大悲胎藏三昧耶略曼荼羅」一鋪一幅苗があるが、いずれも白描画である。曼荼羅の将来については、会昌6年(846)6月29日の条に、「先寄功德文書之中、胎藏金剛兩部大曼荼羅盛_レ色者、縁_二淮南勅牒嚴切_一劉慎言已焚訖。其余苗画及文書等、具得_二将来_一。」(小野4、271—272頁)とあり、胎藏金剛兩部曼荼羅の「盛色」すなわち彩色のものは焼却されたが白苗の曼荼羅は会昌廢仏の難を逃れて将来できたことが知られる。ただし、4月28日条の胎藏幀が彩色か白苗かは不明であり、『新求目録』所載の胎藏曼荼羅が4月28日条の胎藏幀に相当するかどうかは定かではない。

4月30日条には、「画_二金剛界九会曼荼羅_一功錢商量定、除_二画絹_一外六千文。真和尚教_二化俗人_一、助_二加絹卅六尺_一、賜_レ宛_二画絹_一。」(小野3、388頁)とあり、金剛界九会曼荼羅の制作費を相談した結果、工賃は画絹以外で6000文と決まった。そこで、義真が円仁のために画絹代として在家の人々から絹46尺の布施をさせている。5月3日は金剛界九会曼荼羅を始めて描き、また青龍寺にて灌頂を受けた日として注目すべきである。『巡礼記』には、

始画_二金剛界九会曼荼羅幀五副_一。除_二画絹_一以外、六千文、是画功也。此日於_二青龍寺_一、設_二供養_一。便於_二勅置本命灌頂道場_一、受_二灌頂_一抛_レ花。始受_二胎藏毗盧遮那經大法、兼蘇悉地大法_一。(小野3、393—394頁)

とあり、4月30日条に工賃6000文と決まった金剛界九会曼荼羅幀五幅を描いている。『新求目録』には、「金剛界九会曼荼羅」一鋪五幅苗（白描）があるが、『巡礼記』の「金剛界九会曼荼羅幀五幅」が、白描か彩色かを明示していないので、『新求目録』と『巡礼記』所載の曼荼羅が同一かどうかは明らかでない。また、青龍寺の勅置本命灌頂道場において胎藏界大法と蘇悉地大法の灌頂を受けている。これは、灌頂壇において覆面して敷曼荼羅に向かって花を投げ、花の当たった尊像を有縁の仏としつつ、真言密教の奥義を授けるものである。空海の『御請来目録』には、

六日上旬入_レ学法灌頂壇_ニ。是日臨_レ大悲胎藏大曼荼羅_ニ、依_レ法抛_レ花。（中略）
七月上旬更臨_レ金剛界大曼荼羅_ニ。重受_レ五部灌頂_ニ。亦抛_レ花得_レ毗盧舍那_ニ。（『大正藏』55卷、106a—b）

とあり、空海もこの青龍寺東塔院において、恵果阿闍梨の元で貞元20年（延暦24年、805）6月上旬に大悲胎藏大曼荼羅に臨んで学法灌頂を受け、7月上旬に金剛界大曼荼羅に臨み、五部（仏部、金剛部、宝部、蓮華部、羯磨部）灌頂を受けている。円仁の『大日経』に関する将来典籍は、『大日経略摂念誦随行法』一卷 不空、青蓮院本のみ記載の『大日経序并献華樹様状』一卷があり、蘇悉地については、長安にて『蘇悉地并蘇摩呼経』梵本一夾両部二卷、『蘇悉地羯羅供養真言集』一卷を将来している。円仁が胎藏界と金剛界のみならず、蘇悉地大法を受け、三部大法として比叡山に伝えたことは、後に円仁によって確立された天台密教の基本的立場として注目しておかなければならないであろう。なお、『巡礼記』にはこの日誰から灌頂を受けたかということを書いていないが、三千院本『慈覚大師伝』に、

巡_レ赴青龍寺_ニ、礼_レ拝真大阿闍梨_ニ、発_レ至誠心_ニ。屈請為_レ師、聽許已後、入_レ胎藏灌頂道場_ニ、奉_レ供諸尊_ニ。方始習_レ学毘盧遮那経中真言、印契、并真言教中微細儀式_ニ。并蒙_レ師許可_ニ、即至_レ奉_レ胎藏大曼荼羅_ニ。（天台宗典編纂所編『続天台宗全書』〔以下『続天全』〕史伝部2、春秋社、1988年、50頁下）

とあり、義真に礼拝した後灌頂道場に入り諸尊を供養し、『大日経』中の真言・印契・真言教の微細な儀式について学んだとある。また、『類聚三代格』の嘉祥元年六月十五日応_レ修_レ灌頂_ニ事には、

其年五月、於_レ青龍寺勅置本命灌頂道場不空三蔵弟子義真阿闍梨辺_ニ、受_レ灌頂_ニ、受_レ大毘盧舍那経秘旨、及蘇悉地大法_ニ。（黒板勝美編『新訂増補国史大系 類聚三代格』吉川弘文館、前篇70頁）

とあり、義真より『大日経』の秘旨と蘇悉地経大法を受けたと記されている。また、三千院本『慈覚大師伝』にも同文が引用されていることなどから、この青龍寺での灌頂は、義真からの受法であったことは間違いないものと見られる。

6月11日、「今上降誕日、於内裏設齋。両街供奉大徳及道士集談経。四対論議、二箇道士賜紫。尺門大徳総不得著。」(小野3、399頁)とあり、皇帝の誕生日であるこの日内裏において三教談論が行われている。皇帝降誕日に関する典籍として、『新求目録』には、『皇帝降誕日内道場論衡』一卷があるが、これは後漢の王充撰『論衡』に関する書物かと思われる。また、この後「南天竺三蔵宝月入内対君主、従自懐中、拔出表進。請帰本国。不先諮、開府悪発。」(小野3、399頁)とあり、前述のインド僧宝月三蔵がインドに帰国することを直接皇帝に請い、開府(宦官仇士良)の怒りを招いた記述が見られる。この後の6月15日、宝月の弟子3名が功德使によって越官罪とされて棒で打たれ、宝月は帰国を許されなかった。円仁は翌年の会昌2年(842)4月に宝月より悉曇を学んでおり、彼の動向についても注目していたと思われる。この辺りから『巡礼記』の記述は頻度が減り、8月7日になって「為帰本国、修状進使。」(小野3、403頁)とあり、円仁も本国に帰るため牒を功德使に提出し、巡礼の経過を記し処分を求めているが、先述の宝月の帰国不許可の情報によって、早期に帰国に向けて行動する必要性に迫られたと思われる。12月3日条には、「移住西院。」(小野3、410頁)とあり、この日以降円仁は資聖寺の浄土院から西院に移って滞在を続けることになった。

会昌2年(842)―5年(845)の求法活動と将来物蒐集

年は会昌2年(842)に改まり、正月1日条に「諸寺開俗講。」(小野3、412頁)とあり、諸寺で俗講が開かれている。この俗講と関連して、円仁が書写したと見られるのが『新求目録』の『仁王般若経疏』三巻天台である。なぜなら、京都禅林寺図書館蔵の鎌倉初期古写本『仁王経私記』巻下の奥書(下巻尾題下)には、「大唐会昌二年正月十三日、上都資聖寺写畢。帰国流伝、法輪常転。」⁽¹³⁾とあり、正しくこの時資聖寺に滞在してい

⁽¹³⁾ 佐藤哲英『天台大師の研究』百華苑、1961年、527頁によれば、「しかるに源信の三身義私記に仁王経私記云。妙覚極智毘盧舎那唯独一人生常寂光土。

とある文は明らかに現行疏(大正(三三、二七六b)と一致する。また先年青蓮院の吉水蔵から検出した六即義私記の未再治本(拙稿「六即義私記の研究」龍谷学報三一七号所載参照)には

問。先約初義有_レ何証_レ。云仁王経蜜明等覚也。答。仁王経私記中巻云。問。諸経有_レ等覚。何故此中不_レ立。答。依_レ余経。即合有_レ三品。下品(十地)中品等覚。上品妙覚。今般若時通不_レ同_レ別教。故但論_レ法雲_レ及_レ仏地。故大品云十地菩薩為_レ如_レ仏云云。(中略)問。仁王経私記文甚狼藉。可_レ対_レ正文_レ檢案

上。

と、仁王経私記の名で引用されているものは、正しく現行疏第四巻(大正、三三、二七一 a-b)の文であり、本疏の源信所覧本は観無量寿経疏頭要記文にも、「三巻私記

たのは円仁であり、彼が写した可能性がきわめて高いからである。ただし、『新求目録』の『仁王般若経疏』と禅林寺本の『仁王経私記』とは少し書名が異なるが、佐藤哲英氏の研究に基づき⁽¹⁴⁾、同一書と見るのが妥当であろう。

2月29日は玄法寺（長安街東第四街第六坊）の法全阿闍梨ならびに大安国寺（街東第四街第一坊の長樂坊）元簡阿闍梨の元にて受法を行った日として重視すべきである。「於玄法寺法全阿闍梨所、始受胎藏大法。又於大安国寺元簡阿闍梨所、重審決悉曇章。」（小野3、4-7頁）とあり、まず法全の元にて胎藏界大法を受けている。法全は先述の海雲・造玄の血脈譜で見たように、善無畏三蔵から数えて第4番目に当たり、恵果の孫弟子であり、法潤の弟子である。円仁が長安にて最初に胎藏界大法を受けた青龍寺義真も恵果の孫弟子であり、義操から法を受けている。この日の受法のことは、三千院本『慈覚大師伝』に引用されている嘉祥元年6月15日の「太政官牒延曆寺応修灌頂事」によると、「従会昌二年二月五日、於善無畏三蔵第四弟子玄法寺法全阿闍梨所、入灌頂壇、受胎藏大法并諸尊法。」（『続天全』史伝部2、54頁上）とあり、法全からの受法を受けた日付は2月5日からのことになっている。また、この日大安国寺の元簡より重ねて悉曇章を審決している。悉曇はすでに揚州において宗叡、全雅より学んでおり、円仁の悉曇学習への情熱が窺える。この点は、『新求目録』の諸本の記載によると揚州において44部、長安においては83部、合計で127部の梵語、梵漢両字經典が記載されていることから窺える。これは、『諸阿闍梨真言密教部類総録』巻下に「悉曇章一卷 仁安国寺本」（『大正蔵』55、1130頁 c）とあり、安然の注記によって大安国寺にて写したものであったことが分かる。この元簡については、『新求目録』中に『梵字悉曇字母』一卷 安国寺^{かみん}侃和尚本、『悉曇章』一卷 元侃述、『梵本切韻十四音十二声』元侃述と見えているのが元簡より得た書物と考えられる。『新求目録』において、「梵語」と名のつく書物は字書である『翻梵語』十巻、『梵語雑名』一卷（揚州にて将来）があり、『梵語千文』一本 義浄（青蓮院本のみ記載）も見られる。

この後の記事である3月3日条は、会昌廢仏の最初の詔勅が出された日として注目される。すなわち、「李宰相聞奏僧尼条流。勅下、発遣保外無名僧、不許置童子・沙弥。」（小野3、420頁）とあり、宰相李徳裕の奏聞により保（隣保など）に所属していない無名の僧侶を追放し、同様に無所属の沙弥を置くことを禁じている。

3月8日、「薦福寺開仏牙供養。詣寺随喜供養。街西興福寺開仏牙。」（小野3、424頁）とあり、大薦福寺（街東第一街第二坊の開化坊）にて仏牙の供養が行われているが、『新求目録』に『長安左街大薦福寺讚仏牙偈』一卷 知玄述があり、先述の知玄和尚によってこの仏牙会を讚える偈が著されている。また、この日功德使の巡院（出張所）から、「巡院転帖興善・青龍・資聖寺三寺外国僧三蔵等。右奉軍容処分、前件外

あり世に伝う」といっているように仁王経私記なる三巻本であったことが知られたのである。」と述べられている。

⁽¹⁴⁾ 佐藤哲英『天台大師の研究』百華苑、1961年、527頁。

国僧並仰安存、不_レ得_二發遣_一者、事須_二轉帖_一。」(小野3、424頁)、すなわち大興善寺・青龍寺・資聖寺に滞在する外国僧(青龍寺は宝月三蔵と弟子僧、資聖寺は円仁と弟子僧)を安存(保護)し、發遣することを認めない旨の牒が出されている。4月、日付はないが「玄法寺法全座主解_二三部大法_一。施_二胎蔵大軌儀三卷、兼別尊法・胎蔵手契_一、宛_二遠国広行_一。」(小野3、436頁)とあり、先述の法全が円仁のために『胎蔵軌儀』三卷(二卷の誤りか)、『別尊法』三卷、『胎蔵手契』を施与している。このうち『胎蔵軌儀』は、『新求目録』に記載の『大毗盧遮那成仏神變加持經蓮華胎蔵悲生曼荼羅廣大成就儀軌』二卷 法全、『胎蔵手契』は『大悲胎蔵手契』一卷に相当すると考えられる。

5月26日条には、「五月十六日起首、於_二青龍寺天竺三蔵宝月所_一重学_二悉曇_一、親口_二受正音_一。」(小野3、454頁)とあり、この日から青龍寺のインド僧三蔵宝月に悉曇を学び、直接正しい発音を教わっている。先述の通り、悉曇は長安において元簡よりすでに学んでおり、円仁がいかにか悉曇を重視していたかが分かる。

年号は会昌三年(843)に改まり、仏教弾圧は激しさを極めている。『巡礼記』に記述はないが、三千院本『慈覚大師伝』にはこの年の3月12日に前述の法全阿闍梨より「受_二伝法灌頂_一。」(『続天全』史伝部2、54頁上)とあり、伝法灌頂を受けたことが記されているのである。

なお長安での元政・義真・法全等からの真言密教の受法により、後に確立していく円仁の密教思想について少し触れておきたい。

円仁は将来した密教經典や儀軌、論書を元に(1)円密一致論 (2)顕密二教判 (3)一大円教論を展開していることが、木内堯央師⁽¹⁵⁾によって指摘されている。これらは円仁撰『金剛頂經疏』及び『蘇悉地經疏』に論及されており、「円密一致論」については、『法華經』(円教)と『大日經』(密教)との一致を説くものであり、最澄が示した日本天台の基調を継承したものとみられる。「顕密二教判」については、三乗教(権教)を「顕教」とし、真言密教とともに『法華』『華嚴』『維摩』『般若』等の諸大乘教もまた一乗教であるが故に「密教」と位置づけ、一乗經典と密教經典が同価値であると見ている。これは空海の密教至上主義と大いに異なる点であろう。

さらに円仁の密教観における究極の考え方は、「一大円教論」であると見られている。これは『金剛頂經疏』(『大正藏』61卷、16b)に、

如来但説_二真言頓証無上法門_一、曾無_二他事_一。是即名為_二隨自立_一也。是故大興善寺阿闍梨云、若就_二真言_一而立_レ教者、応_レ云_二一大円教_一。如来所_レ演無_レ非_二真言秘密道_一故。

とあり、大興善寺阿闍梨すなわち元政の教示に依ったものである。それによれば、円密一致、顕密二教判を立ててはいるが、最終的には如来の教えは全て絶対の一大円教とい

⁽¹⁵⁾ 木内堯央『天台密教の形成』春秋社、1984年、287頁—293頁。

う真言秘密道に帰着されることになる」と述べており、特にこの思想は入唐求法による成果の一端であるといえる。

会昌4年(844)は廃仏の記事で埋められ、求法に関する記述は見られない。おそらく勅によって外出もままならず、資聖寺の一角で求得の経論に目を通す日々であったと想像される。会昌5年(845)、4月—5月(日は記載なし)に以下のように記している。

有_レ勅云、外国等若無_レ祠部牒_レ者、且勒還俗_レ遯_レ帰本国_レ者。(中略)日本国僧円仁・惟正且無_レ唐国祠部牒_レ。功德使准_レ勅、配_レ入還俗例_レ。又帖_レ諸寺_レ。牒云、如有_下僧尼不_レ伏_レ還俗_レ者_上、科_レ違勅罪_レ、当時決殺者。聞_レ此事_レ、装_レ束文書・所_レ写経論・持念教法・曼荼羅等_レ、盡装裏訖。文書兼衣服都有_レ四籠_レ。便買_レ三頭驢_レ、待_レ処分来_レ。心不_レ憂_レ還俗_レ、只憂_下所_レ写聖教不_上得_レ隨身将行_レ。又勅切_レ断仏教_レ、恐_下在_レ路諸州府檢勘得_レ実、科_中違勅之罪_上。(小野4、134頁)。

とあり、唐国の祠部の牒がない外国僧も還俗して帰国せよとの勅が出ており、円仁と惟正も功德使によって還俗の対象に定められている。次に、諸寺へ万一還俗を行わない者は違勅罪に科して決殺(死刑)にするとこの牒が通達され、これを聞いた円仁は直ちに手元にある文書・写すところの経論・持念の教法・曼荼羅などを包み、文書と衣服は四籠にまとめ、三頭の驢馬を購入している。「只憂_下所_レ写聖教不_上得_レ隨身将行_レ。」という記述から、円仁にとって聖教類を持ち出すことができるかどうか最大の懸念であったことが窺える。

5月13日、「都維那僧法遇、贈_レ檀龕像一軀_レ、以宛_レ帰国供養_レ。」(小野4、137—138頁)とあり、三綱の一人であった都維那僧法遇は円仁に檀龕像一体を贈っている。『新求目録』には、「^(マツ)壇 龕涅槃浄土」一合、「^(マツ)壇 龕西方浄土」一合、「^(マツ)壇 龕僧伽誌公萬廻三聖像」一合が記載されており、この時贈られたものはこのうちいずれかであったと思われる。これら檀龕像は、枕本尊と呼ばれる小型の檀像で、白檀などの木材に仏像が彫刻されたものである。「^(マツ)壇 龕涅槃浄土」、「^(マツ)壇 龕西方浄土」は、各々涅槃浄土及び西方浄土の様子が刻まれたものであり、「^(マツ)壇 龕僧伽誌公萬廻三聖像」一合は三聖像すなわち泗州大師僧伽和尚(629—710)と宝誌和尚(425—514)、萬廻和尚(632—711)の姿を刻んだものであり、観世音菩薩の応化として信仰されたと見られる⁽¹⁶⁾。特に僧伽和尚は水路安全の守り神として民間に信仰され⁽¹⁷⁾、円仁が揚州滞在中の『巡礼記』開成5年(840)3月7日条にも記されており、当時広範囲で信仰が行われていたことが窺えるが、道中の無事を祈って贈られたのであろう。この日の夕方、資聖寺の僧侶に別れを告げて俗衣を

⁽¹⁶⁾ 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964年、697—698頁。

⁽¹⁷⁾ 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964年、695—696頁。

纏った円仁は、5月15日に京兆府を去り、万年県（街東宣陽坊の東南隅）に到った。この日、「大理卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之、曾任御史中丞。令專使來問何日出城、取何路去。」（小野4、143頁）とあり、中散大夫の楊敬之（—835—）の使いが来て円仁にいつ長安を去りどの道で帰るのかと尋ねている。『新求目録』に『維摩經疏』一卷 豫州刺史楊敬之撰があるが、これは楊敬之との縁によって得た可能性がある。本書は鳩摩羅什訳『維摩經』三卷（『大正藏』14、537a—557b）の注釈書の一つであり、楊敬之が『維摩經』にも造詣があったことが窺える。この後に、「当寺講維摩百法座主雲栖・講涅槃經座主靈莊、先卅已下例還俗訖。」（小野4、143—144頁）とあるが、資聖寺の雲栖座主が講義を行っていた百法論とは、天親菩薩造・玄奘訳の『大乘百法明門論』一卷（『大正藏』31、855b）を指している。これは瑜伽論関連の論書とされ、『新求目録』には、『百法論頭幽抄』十卷 従方述、『大乘百法明門論疏』一卷 忠撰、『百法疏抄』二卷 上下章敬寺擇隣、『大乘百法論義選抄』四卷 阿中全則述、『大乘百法玄枢決』一卷、『大乘百法義門抄』二卷 全則述の6部の注釈書が見られ、円仁の百法論への強い関心が窺える。このうち、円仁将来の『百法論頭幽抄』については、東大寺に重要文化財として『百法論頭幽抄』卷第一の名称で現存しており⁽¹⁸⁾、その巻尾の識語に、「巨唐会昌三年十月廿一日上都資聖寺写畢、惟正記。貞觀十四年二月廿五日聽聞畢、比丘令秀。伝法師前入唐求法惟正大和尚、伝授比丘喜静。謹記。」とある⁽¹⁹⁾ことから、本書は円仁の弟子惟正が会昌3年10月21日に資聖寺において写したものであることが知られる。

この後、長安で約2年間円仁と懇意にしていた新羅人官吏李元佐より餞別の品として、「呉綾十疋・檀香木一・檀龕像兩種・和香一瓷瓶・銀五股抜折羅一・氈帽兩頂・銀字金剛經一卷」（小野4、144頁）などを贈られている。この中に見える檀龕像兩種は、先述の『新求目録』に見られる三合の檀龕像のうちの二合であろう。「銀五股抜折羅」については、『新求目録』に「金銅五鈷金剛杵」一口、「金銅独鈷金剛杵」一口、「金銅五鈷小金剛杵」一口 裏盛仏舎利の3点があるが、『巡礼記』の「銀五股抜折羅」とは別物であろう。

最後に、これら将来物が廃仏の厳しい条件の中で長安からどのようにして運ばれたかについて見ておきたい。会昌5年（845）6月23日盱眙県に到った円仁は、「従盱眙県至揚州九駅。無水路。文書籠馱、每駅賃驢之。」（小野4、185頁）とあり、盱眙県に到り、初め水路で楚州を目指していた円仁は、この後揚州に向かうことを余儀なくされ、九駅にわたる陸路を驢馬で移動している。7月5日に楚州の劉慎言宅に到着し、登州へ向かう道中で粗悪な心を持つ人々によって隨身物に危害が加えられる可能性があることを彼より聞かされた上で、「共劉語商量、従京将来聖教功德幘及僧服等都四籠

(18) 国宝・重要文化財目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録美術工芸品編』下巻、ぎょうせい、1999年、1058頁。

(19) 稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本 百法論頭幽抄の古點について」『訓点語と訓点資料』第7輯、1956年、25頁。

子、且寄_二着_一訳語宅裏_一、分_二付_一訳語_一、嘱_レ令_二檢校_一。」(小野4、201頁)すなわち求得の法門や僧服を納めた四籠は劉慎言に預けることを決め、失うことのないよう頼んでいる。そして、翌会昌6年(846)2月5日条には、「為_レ取_下楚州劉慎言処_二寄_一着_一經論等_上、差_二丁雄満_一就_二閩方金船_一、遣_二楚州_一。大使勾当、発_二送其船_一。」(小野4、259頁)とあり、劉慎言に預けた将来物等を取りに行かせるため入唐中行動を共にしてきた従者の丁雄満を楚州に派遣している。同年6月29日条には「丁雄満来到。兼得_二楚州劉慎言書_一。先寄功德幀文書中、胎藏金剛兩部大曼荼羅盛_レ色者、縁_二淮南勅牒嚴切_一、劉慎言已焚訖。其余苗画及文書等、具得_二将来_一。」(小野4、271—272頁)とあり、この日楚州より戻った丁雄満より得た劉慎言からの書状には、淮南の勅により彩色が施された胎藏金剛兩部大曼荼羅は彼の手によって焼かれたが、その他の苗画及び文書などは将来できたことが窺える。以上が廃仏における将来物運搬に関する『巡礼記』の記録である。

結語

大中元年(847)6月18日、新羅人王可昌の船に乗り、8月15日登州界(文登県界か)の船上にて再び緇服を纏った円仁は、9月2日赤山浦より渡海し、9月18日太宰府鴻臚館前に到った。『巡礼記』は、12月14日に比叡山より円仁を迎えに弟子南忠が到来したことを記して筆を置いている。以上、考察を行った開成5年(840)8月22日から会昌5年(845)5月15日の約五年間滞在した長安での求法の要点を示すと次の如くである。

長安での求法の中心は、真言密教であり、円仁はまず密教の阿闍梨(持念知法人)に関する確実な情報を入手した上で、胎藏界・金剛界・蘇悉地のいわゆる「三部大法」を受法した。具体的には、開成5年(840)10月29日と開成6年(841)2月13日には大興善寺元政より金剛界灌頂、会昌元年(841)5月3日には青龍寺義真より胎藏界と蘇悉地大法の灌頂を受けている。さらに会昌2年(842)2月には玄法寺法全より胎藏界大法を受け、また大安国寺元簡や青龍寺宝月からは悉曇を受法している。長安で蒐集した将来物の内容はこれら密教受法に関するものが大半を占めているといえる。

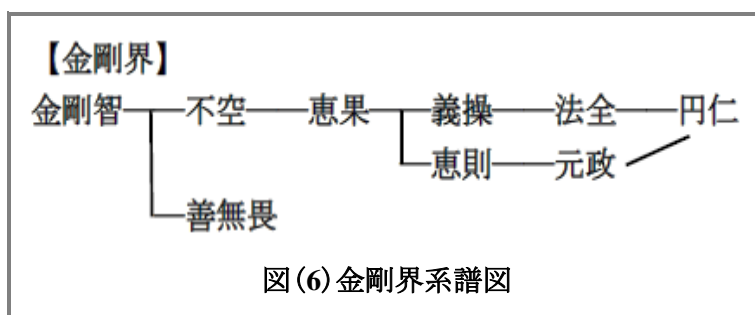
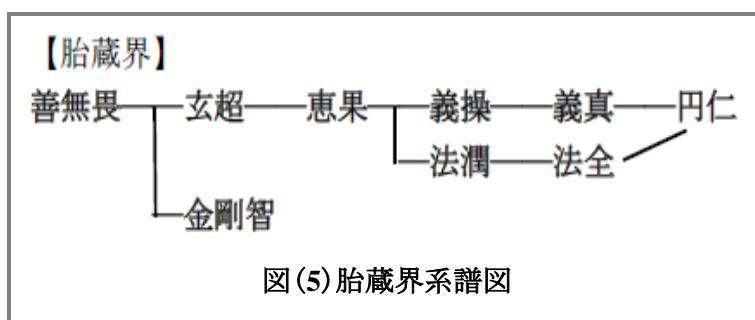
具体的に見ると、金剛界大法を受けた元政からは、目録に見られるように特に金剛界関係の儀軌や念誦法を借写したことが知られる。また受法道場である大興善寺の壁上に掛けられていたインドの金剛智や不空など金剛界系の祖師方の真影も将来している。なおこの大興善寺は、かつて不空在住の訳場であり、かつ勅置灌頂道場であることから、不空訳の密教典籍及び文殊に関する典籍を多数蒐集している。

青龍寺にては義真より胎藏界並びに蘇悉地大法の灌頂を受けているが、『蘇悉地羯羅供養真言集』など蘇悉地関係の書物はこの時に得たものと見られる。またこの灌頂に先立ち義真の指揮により制作したのが目録記載の「大悲胎藏法曼荼羅」一鋪三幅苗と「大悲胎藏三昧耶略曼荼羅」一鋪一幅苗(白描)であろう。なお彩色の曼荼羅は会昌廃仏により焼却されたものと見られる。

玄法寺法全からの胎藏界大法及び大安国寺元簡からの悉曇受法について見ると、法全

からは胎蔵界大法を受け、目録の『胎蔵儀軌』や『胎蔵手契』など胎蔵界関係の書目の多くはこの時法全から授かったものと考えられる。また元簡や青龍寺宝月からの悉曇の受法については、目録に見られる梵語・梵漢両字 83 部のほとんどが両師より得たものと思われる。

なお、胎蔵界と金剛界の円仁に至る師資相承の系譜について、海雲の『金胎両界師相承』及び造玄の『胎金両界血脈』、ならびに『巡礼記』等によって円仁の密教大法の血脈譜について考察した。その要点を総括的に論じると、胎蔵界大法については義真と法全から受法し、金剛界大法は法全と元政から受法したことが明らかとなってきた。これら胎蔵界と金剛界との系譜の要点を図示すると次の如くである。



なお、円仁の密教教学の特徴は「一大円教論」にあるが、その教示については金剛界大法を授かった大興善寺阿闍梨、すなわち元政に依ったものであることを、円仁著『金剛頂経疏』によって確認することができた。しかも円仁の血脈譜において、元政は法全や義真とともに最も重要な人物の一人であったことが、『巡礼記』記載にみる大興善寺での元政の元での念誦法門の書写や、灌頂の記述によっても明瞭となった。さらに、『新求目録』の密教関係の将来物の内容と『巡礼記』の密教受法の詳細な記述とを勘案してみると、胎蔵界・金剛界・蘇悉地の三部の大法を具備する円仁の密教教学の特徴は入唐求法によってその素地が整いつつあった点が確認されるに至った。

また、円仁の毘沙門天に関する関心の深さから、不空訳の『毘沙門天王経』や『同真言法』などを蒐集将来している。法照の五会念仏については、法照の弟子鏡霜が章敬寺を中心に、長安諸寺においても盛んにこれを伝えていたことが知られ、念仏に関連する

書として道綽の『浄土法事讃』や善導の『念仏讃』なども目録に見られる。瑜伽唯識に関するものでは円仁の弟子惟正が資聖寺で書写した『百法論頭幽抄』など数部の書が将来され、『百法論』への関心の高さが知られる。

その他、会昌への年号改元に関する『皇帝拝南郊儀注』などの文献、また俗講に関する『仁王般若経疏』や三教談論の知玄が著わした書物も数点将来している。さらに円仁帰国への道中の無事を祈って贈られた檀龕像や餞別の品なども目録に記載しており、円仁の外護者や交友関係を窺う上でも興味深い。

参考文献

- ・稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本 百法頭幽抄の古點について」『訓点語と訓点資料』第7輯、1956年。
- ・小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第1—第4巻、鈴木学術財団、1964—1969年。
- ・木内堯央『天台密教の形成』春秋社、1984年。
- ・黒板勝美編『新訂増補国史大系 類聚三代格』吉川弘文館、1972年。
- ・国宝・重要文化財目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録美術工芸品編』下巻、ぎょうせい、1999年。
- ・小南沙月「円仁将来目録の研究—『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析—」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』第15号、2016年。
- ・小南沙月「慈覚大師円仁『入唐新求聖教目録』」『史窓』第74号、2017年。
- ・佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、1979年。
- ・佐藤哲英『天台大師の研究』百華苑、1961年。
- ・高楠順次郎編『大正新脩大蔵経』47・50・52・55・61巻。
- ・天台宗典編纂所編『続天台宗全書』史伝部2、春秋社、1988年。
- ・前田慧雲編『大日本続蔵経』第1輯、95、5冊、京都蔵経書院、1905—1912年。
- ・牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964年。